

# 第97回 ザ・ダーツ『ケメ子の歌』と ニール・セダカの『縁』

読売ジャイアンツが5年ぶりにセ・リーグ制覇をなしとげましたが、かつてグループサウンズの世界にもジャイアンツなるバンドが存在しました。

昭和42年末、タイガース（もちろんGSです）を蹴落として『恋人と呼んでみたい』でレコード大賞新人賞を獲得したアイドル歌手・永井秀和のバックバンドを務めていたジャイアンツは、翌43年1月25日に発売されたデビュー曲『ケメ子の唄』でオリコン6位という、知名度以上の実績を残しています。

ただし『ケメ子の歌』といえば、もう一つの競作バンド、ザ・ダーツの持ち歌という印象のほうが強く、ジャイアンツ盤よりも1週間遅く発売されたにもかかわらず、シングル盤のジャケットに「オリジナル盤」と謳い、オリコン最高位2位を獲得しています。

当時の歌詞カードにはどちらも「作者不詳、補詞採譜・浜口庫之助」と記されていますが、あらためて

両曲を検証してみると、「唄」と「歌」という題名の違いや歌詞の内容、テープの早回しなどの相違とは別に、

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いつまでも



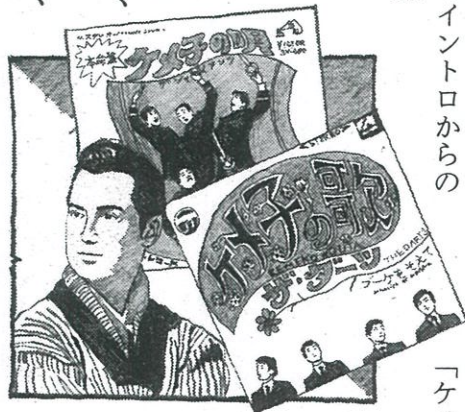
堀井六郎 浦松本 絵

最大の違いは彼らの風貌と曲のイントロにありました。

GSの象徴でもあったミリタリーロック姿でエレキサウンドとテープの早回しを強調したジャイアンツ盤に対し、スーツとネクタイを着用し短髪姿のダーツの歌はGS特有の絶叫とは無縁で、むしろ立命館大学の学生らしくカレッジソングの雰囲気さえ漂わせていました。そして台詞から始まるイントロ部分からは一度聴いたら忘れない、「デュワーパーパーポデューバッシュダンダン」という素敵なバックコーラスが聞こえてくるのでした。

この「デュワーパーパー」と歌われるスキヤット風のフレーズですが、昭和37年に発売されたニール・セダカの『かわいいあの子』（梶光夫ではありません）のイントロからの盗作ではないかと騒がれました。

ダーツがホリプロに入社する8年前、昭和35年はニール・セダカの当たり年でした。『恋の片道切符』が大ヒットして、数多くのカバー盤も発売され人気は沸騰、



その勢いを駆って4月に来日。そのときバックバンドとしてサポートしたのが、堀威夫（現・ホリプロ会長）率いるスイング・ウエストでした。堀とニールの間に親交が結ばれ、すでに裏方に徹することを決めた堀のバンド引退の日は、ニールの日本公演最終日でもありました。

8年後、一部でひそかに話題になっていた『ケメ子の歌』を聴いてみた堀たちは、失恋ソングにもかかわらず循環コードを使用した明るく覚えやすいメロディーに、同じ循環コードを多用してラブソングを歌うニールのことを思い浮かべたかもしれません。ジャイアンツ盤と競作になることを察知していたダーツ側としては、魅力を増すための確信的なイントロ拝借だったのだと思います。

「ケメ子」の競作は、テープの早回しを使いGS風のエレキサウンドに仕立てただけのジャイアンツ側に対し、そこにカレッジポップスの雰囲気とアメリカンポップスを融合させたダーツ側の作戦勝ちに終わりました。